

尾形亀之助研究：詩と詩法と詩論の軌跡

岩下，祥子

<https://doi.org/10.15017/1806785>

出版情報：九州大学，2016，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）



氏 名 : 岩下 祥子

論 文 名 : 尾形亀之助研究 ―詩と詩法と詩論の軌跡―

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、尾形亀之助の詩業の全体像について、未報告の資料の発掘等を通じて再検討し、初期から晩期に至る作詩上の問題点を指摘しつつ、詩性の特性を検証した論文である。

尾形亀之助(1900-1942)は、1920年代から40年代(大正末から昭和初期)に活動した詩人である。今日においても一般的な知名度は高いとは言えないが、全集も二度刊行されている。思潮社刊の現代詩文庫や青空文庫でも作品を読むことが出来る。その詩作は決して埋没しているわけではなく、評価の現状としては、マイナーポエットとして著名というパラドックスを抱えている。詩人の評伝、芸術グループ「マヴォ」、詩誌「亜」、草野心平や高村光太郎とのかかわり等、詩関連の研究や批評でも言及される事例は少なくない。しかし、尾形の詩の詩性(詩の特性、方法上の特色、実験性等)については、未だ十分な究明がなされていない。本論文は、まとまったかたちで詩論を残していない尾形の詩の詩性について、詩自体の表現上の特色を分析するとともに詩集評や座談会資料などを通じて究明するものである。

本論文は、序論、本論、結論で構成されている。

序論は、考察の前提として先行研究の概要を紹介し、問題点を指摘している。最も大きな論点として、詩作する主体の問題および詩人の詩作態度があり、それに対し、主体と対象との「距離」、「距離」の表現、「詩」への向き合い方という視点から分析を試みる事が提起されている。

本論は、詩作の初期から晩年に向かう詩の変遷に沿う七章から構成されている。

第一章は、第一詩集『色ガラスの街』の詩篇に共通する表現上の特色について分析する。具体的には、「～の中」という表現の多用に注目し、それをういた詩の分析を通じて、仙台在郷時に関係があった石原純経由での相対性理論の受容と反映の可能性について考察している。

第二章は、『色ガラスの街』収録の「白い手」に注目する。近年、文字テキストのみの『色ガラスの街』の他に、図像テキストが付された「白い手」の存在が明らかになった。尾形が二つの表現媒体(絵画と詩)を持つことの確認作業、詩画「白い手」の初出掲載が百貨店の機関誌「三越」であること、同人として参加した「亜」との関係などから、詩画という方法について考察する。

第三章は、室生犀星を強烈に批判した詩集評「詩集『鶴』を評す」を素材に、詩集評が一種の詩論として機能していることを検証する。尾形にはまとまった「詩論」がないが、詩集評批判を通じて「詩論」を再構成する試みである。

第四章は、「詩論」や「詩観」を窺う資料として、中村漁波林と黄瀛という詩友宛の文章を検討する。二人は、尾形とは、詩誌「詩文学」や「銅鑼」を通じた関係がある。新興詩人に詩を書く場を提供した漁波林、「銅鑼」に拠る草野心平や黄瀛、尾形らを自宅に招いた高村光太郎などとの関係を確認し、「詩文学」や「銅鑼」で共有されていた同時代的な問題を炙り出す。その上で、同時代詩壇に対する彼らの距離感や尾形の「詩観」の特色である対象への細やかな眼差しについて考察する。

第五章は、「詩論」や「詩観」を窺う資料として、座談会資料について検討する。当時、尾形は第二詩集『雨になる朝』を「童心」と評した北川冬彦との論争の渦中であり、その際の尾形の問題意識について、萩原恭次郎など座談会の他の出席者の発言や人間関係などの分析を通じて考察する。

第六章は、晩期における尾形の創作意識について、野村吉哉の詩集の批評文や小説「在郷詩人之図」（1933）を中心に検討する。この小説は、尾形の帰郷後の作品である。従来、帰郷と詩の退嬰が結びつけられ、小説の意義は十分に考察されなかった。しかし、尾形には絵画から詩に転じた過去がある。その転向の意味や詩との関係は、第三章で検討した。詩から小説へという試みにも、方法上の模索が反映している可能性は小さくない。しかも、小説は、仙台の詩人の出版記念会を描く内容である。その点に注目し、尾形の晩期の創作意識について検討するとともに、小説の意義についても再考する。

第七章は、尾形の晩期の創作について、詩「浅冬」の読解を通じて考察する。具体的には、尾形の詩の特色として対象との「距離」に注目する。とくに対象との「距離」が問題になるのは「妻」や「子ども」であり、尾形の詩の詩性が、そうした対象との「距離」と不可分であることを検証する。

結論では、以上を踏まえて、尾形の詩と詩法と詩論の軌跡として、「私」という問題、「私」と「対象」との「距離」という問題、詩人の「詩」への態度という問題があることを指摘し、その問題を軸にして尾形の詩業の全体像を整理している。今後、視野を広く持ち近代詩史における尾形の詩の位置付けを明確にすることが必要であり、本論文の課題として挙げられる。

なお、尾形には、全集が二回出ているにもかかわらず、散逸資料も多い。本論文では、第三、五、六、七章で、『全集』未収録資料を発掘して考察した。また、「資料編」として、現在確認可能な範囲で尾形の著作を整理し「尾形亀之助著作目録」を添付した。